

奉知録三

太政官文庫			
		八	和
		一七	書
		二	門
二	九	七	
五	九	二	
冊	架	函	號

內閣文庫			
		八	和
		一七	
		二	
一	二	七	
五	五	二	
七	冊	號	
函			
一			
九			
架			

內閣文庫	
番號	和 8172
冊數	25 (3)
函號	157 357



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak 2007 TM: Kodak



舉知録卷三

吉川惟長

夫吾國と天地の間に始若別と先もあらざれば世界も亦猶
 也たるよりいふ八洲も一なり也時神時海神時皇言天地より俱
 中神福中神許り命化まり〜一は神大佐の神明とまりは
 あり〜あり〜あり〜命人々をうけあり〜也夫天命とありい
 る倫の正と速あり〜百民と教有り〜も名臣の^義あり〜又^五處の如と
 多〜あり〜又百民の國我を好む自然の風俗とあり〜國我を好
 政の本と〜に意を^施〜四海と治りあり〜先と天璽子の徳と云
 璽子の徳と^徳璽子の名玉の^{名玉}と〜^{中三}澤之國我有り〜也^中と^施と
 時と威有り〜^徳徳有り〜^徳徳有り〜四海安靜と治りあり〜天照大神
 にもあり〜天下と治りあり〜天照大神とあり〜璽子の徳と^中と
 述く〜程の^中とあり〜^中とあり〜事理とあり〜也^中とあり〜^中とあり〜

吉園の志はるく... 返は枚... 志はるく...
... 志はるく... 返は枚... 志はるく...
... 志はるく... 返は枚... 志はるく...
... 志はるく... 返は枚... 志はるく...
... 志はるく... 返は枚... 志はるく...
... 志はるく... 返は枚... 志はるく...
... 志はるく... 返は枚... 志はるく...
... 志はるく... 返は枚... 志はるく...
... 志はるく... 返は枚... 志はるく...
... 志はるく... 返は枚... 志はるく...

道の村... 志はるく... 返は枚... 志はるく...
... 志はるく... 返は枚... 志はるく...
... 志はるく... 返は枚... 志はるく...
... 志はるく... 返は枚... 志はるく...
... 志はるく... 返は枚... 志はるく...
... 志はるく... 返は枚... 志はるく...
... 志はるく... 返は枚... 志はるく...
... 志はるく... 返は枚... 志はるく...
... 志はるく... 返は枚... 志はるく...
... 志はるく... 返は枚... 志はるく...

學問を習ふたはく筆書之を撰法を考へてその書は授而亦
たり撰法といふて筆書を撰法たりといふも文章は書きしむ
ては少く口は書けり書きしむるは少くといふも傳授を考へ
ては少く先生の名は考へて授而亦一書得たは少く書
し中より而余一九鼻先生は大人より書き更たり書得たは
門人よりいへて二平といふも修ふるは少くといふは少く
當時書法とちり書きし九鼻先生の書は少くし其書は少
及き更て書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし
何れも

黄蘗院元と流數十人長流より元と元の子孫即張む書き
書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし

あり黄蘗中の善人独立に元と元の子孫即張む書きし書きし
流り利發し一日も書きし書きし書きし書きし書きし書きし
む撰法の法を用ひて書きし書きし書きし書きし書きし書きし
問ふていつ時性といふ書きし書きし書きし書きし書きし書きし
いんといふ書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし
先生東都よりし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし
書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし
回海鳥書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし
世少く偶在り書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし
何れ撰法といふ書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし
撰法名過并書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし書きし

伊井次郎多入之林の門入之書取寄之々々
比利塔之少く士之身廣海之生舟居之市一
法之入幕本之教本に之の唯執筆の中之
去之注之明白之 我時之生之廣海之生
之三年の中少くいちの一意用之文字の形
之善書之を得之人の知也書名之之之層
必之く之を好事之れれれれれれれれれれ
今之座名之之れれれれれれれれれれれれ
中之れれれれれれれれれれれれれれれれ
の意物之れれれれれれれれれれれれれれ
教之と之れれれれれれれれれれれれれれ

廣海之生之書取寄之々々
比利塔之少く士之身廣海之生舟居之市一
法之入幕本之教本に之の唯執筆の中之
去之注之明白之 我時之生之廣海之生
之三年の中少くいちの一意用之文字の形
之善書之を得之人の知也書名之之之層
必之く之を好事之れれれれれれれれれれ
今之座名之之れれれれれれれれれれれれ
中之れれれれれれれれれれれれれれれれ
の意物之れれれれれれれれれれれれれれ
教之と之れれれれれれれれれれれれれれ

高野の山に...
流石の人...
此の...
括弧...
杉嶋と云う...

長崎中町...
あり...
答...
好む...
いま...
今日...

い...
ま...
え...
日...
さ...
ろ...
は...
あ...
一...

ちうと神妙に脚繩と云ふは、程ある脚繩と云ふ様子なり。輪
車しんぐるまの顯あきと云ふは、古くは死しの多おほきと云ふ事なり。此の處こゝは、
切きつて、つゞきと云ふ事なり。右の處こゝは、紅べにの糸いとと云ふ事なり。細こい
きと云ふ事なり。冷ひややうと云ふ事なり。さうと云ふ事なり。さうと云ふ事なり。
さうと云ふ事なり。さうと云ふ事なり。さうと云ふ事なり。さうと云ふ事なり。
さうと云ふ事なり。さうと云ふ事なり。さうと云ふ事なり。さうと云ふ事なり。
さうと云ふ事なり。さうと云ふ事なり。さうと云ふ事なり。さうと云ふ事なり。

柳やなぎの葉はの剣けんの事ことと云ふは、古くは、柳やなぎの葉はと云ふ事なり。柳やなぎ
の葉はと云ふ事なり。柳やなぎの葉はと云ふ事なり。柳やなぎの葉はと云ふ事なり。
柳やなぎの葉はと云ふ事なり。柳やなぎの葉はと云ふ事なり。柳やなぎの葉はと云ふ事なり。
柳やなぎの葉はと云ふ事なり。柳やなぎの葉はと云ふ事なり。柳やなぎの葉はと云ふ事なり。
柳やなぎの葉はと云ふ事なり。柳やなぎの葉はと云ふ事なり。柳やなぎの葉はと云ふ事なり。
柳やなぎの葉はと云ふ事なり。柳やなぎの葉はと云ふ事なり。柳やなぎの葉はと云ふ事なり。
柳やなぎの葉はと云ふ事なり。柳やなぎの葉はと云ふ事なり。柳やなぎの葉はと云ふ事なり。
柳やなぎの葉はと云ふ事なり。柳やなぎの葉はと云ふ事なり。柳やなぎの葉はと云ふ事なり。

風かぜの管くだ中のなかにの宿とど女をんな此は、此の女の死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。
此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。
此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。
此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。
此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。
此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。
此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。
此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。
此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。
此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。
此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。
此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。
此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。
此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。此の女をんなの死しの事ことなり。

あはれ海舟長のりふ村に人泣きを池邊に中紫波の縁の跡に始り
くきさう

海舟が長七の中へ海舟の口門七人けり城の又も近づく吉良氏の
書もあはれをし時々の人言も君の仇もいふも天を載りし言も
女父の仇も君も言もあはれに城の又も近づく時々に言も白き
大事もあはれに又も言もあはれに君の仇も言も近づく言も
町の大事もあはれに人けり事と老と申すもあはれに言もあはれに
の人おあはれに言もあはれに

海舟が長七の仇も言もあはれに城の又も近づく時々に言も白き
大事もあはれに又も言もあはれに君の仇も言も近づく言も
町の大事もあはれに人けり事と老と申すもあはれに言もあはれに
の人おあはれに言もあはれに

是れは厚情と書謝中しゆくはせきと書したり我は波後と書おし
く又海舟の口門七人けり城の又も近づく時々に言も白き
大事もあはれに又も言もあはれに君の仇も言も近づく言も
町の大事もあはれに人けり事と老と申すもあはれに言もあはれに
の人おあはれに言もあはれに

昔の夜病狂喪心〜二人を殺〜獄より下ふは二月十八日病〜
 獄中〜死に屍を遊才事師の松坊總領の目と鼻ふと友松田去
 伯耆并管を及 杉林を養碑とた〜養碑の著し西の書下郎〜
 海門まきりの野〜或るを〜〜他歴の又か〜今二物臆
 のま〜記

物類品階

萬國圖

火浣布畧記

根引一草 二卷

風流友乃新傳 卷

根引一草後編 二卷

癡淫治述傳 二冊

放尼論 二冊

長枕褥合裁 二冊

放尼論後編 二冊

飛た等の汗 二冊

二冊

雙葉の園 二冊

門二の録

菩提樹の辨 二冊

天物齋齋鑑定録 二冊

神灵矢口渡

源氏大草紙

弓野智管湊

あまのうた源氏

甚新田神傳

五段の戸門

あ太平記古以流

旭濱の〜〜〜如少の時直中〜

あまのうた〜〜〜

あまのうた〜

山村孝吟

孝吟ハ姓名久仰シ又ハ其の^お山村^の子^{なり}
孝吟幼少の時より^孝孝と好んで^孝活陽^の事^{なり}之^孝孝ハ^孝住^の居^の宅^一之^孝医
政學^の意^を庵^に及^び流^を進^{して}正^孝章^の才^を著^すり日^に彼^の節^目自^らと^り
及^び卯^の正^孝保^孝年^の乙^卯年^の書^を繼^ぎ正^孝章^の遺^稿と^り心^を
丹^を秘^し其^の間^に法^布の^名を^著す^る是^をう^がけ^り其^の意^を
持^り流^和分^を志^す或^時ハ^其の^書を^連つ^る自^他つ^る新^稿
千^百の^時自^他見^る概^を一^に流^を連^れ流^を其^の身^の取^を極^め
正^孝章^の刻^後ハ^其の^書を^著す^る正^孝章^の師^を志^すけ^り流^を自^らと^り
流^を著^す一^に流^を著^する^の私^稿の^所ハ^其の^書を^著す^る其^の人^の正^孝章^も遺^稿の^所
其^の書^を著^する^の明^暦三^年ハ^其の^書を^著す^る正^孝章^の自^他を^著す^る退^可可^{なり}

深淵と清くしるの向守武の法十白なりし地非澄よる人老ゆ
かりしと名少く美きしと一と後良山集を編す時南へ今に百十
氏河海にまたりすの良法を令傳し政延享七年より享二年
中く此を

齋藤徳元

徳元は武阜中流のありし舟屋舟あつたさやく二十人の思慮を
り過し長き年石田重頼より一武阜の海を治るは殊方
と解すし入る年舟をりく今武阜の舟屋舟あつたさやく
中書と人の名名の先途にも入るは長良川に武りしとる舟屋
よ大船のやとありし舟屋舟あつたさやくは徳元とこれ
元とこれと一貞徳翁ははしとる舟屋舟あつたさやく
徳元此亭の号を馬喰町二丁目一住を名別とありし年

桶の先まきしとる舟屋舟あつたさやく武阜の非澄也
多しとる徳元ははしとる舟屋舟あつたさやく武阜十
八年非澄也舟屋舟あつたさやく徳元ははしとる舟屋舟あつたさやく
千のなかりしとる舟屋舟あつたさやく徳元ははしとる舟屋舟あつたさやく
非澄也舟屋舟あつたさやく

今まきしとる舟屋舟あつたさやく

高嶋玄札

玄札は武阜別山田の舟屋舟あつたさやく武阜の舟屋舟あつたさやく
高嶋は舟屋舟あつたさやく武阜の舟屋舟あつたさやく
玄札は武阜別山田の舟屋舟あつたさやく武阜の舟屋舟あつたさやく
高嶋は舟屋舟あつたさやく武阜の舟屋舟あつたさやく
玄札は武阜別山田の舟屋舟あつたさやく武阜の舟屋舟あつたさやく
高嶋は舟屋舟あつたさやく武阜の舟屋舟あつたさやく

自室の妻正章あり元和の平年の事六十四年あり元和の事

神田貞朝

貞朝本名平野長清政宣なり後判發一ノ風竹唐に控政を改
む中園に紀別和奇山本末の尾別津島平野より去く信實を平院云
人皇四十七代天武天皇清子舎人親王より民を世治るは清和天皇
より元亨より正代業忠國名南幸の事をも尹良親王名上別寺尾名河川
より元和の事と世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別

よりより一ふし水系に系まて自原より居一武別神田一子を代
から一神田清和元と政の別別若池寺の城と堅固よりより在るは若和
と神田中より一軍忠を築一より一武正和系より居より事あり
上原に別居に別居田村を築居し平院を居るは政の正代政政より居
ると系より一信實の事と一信一和奇より居るの時政宣の居るより一也
初政宣の寛和年中に熊と武竹より一棋を築居る政宣の清和より一居
貞朝の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別

井坂清成

長原の信實名信實の事と一信一和奇より居るの時政宣の居るより一也
初政宣の寛和年中に熊と武竹より一棋を築居る政宣の清和より一居
貞朝の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別
河津の事と傳へたを世傳に信實の忠節を一の三別坂井村に別居の尾別

貞徳も西へく東へ来りぬと云ふ事
後守延彦を帝と稱し
菅原ハ坂田二十二年考考部ハ坂田二十二年の狩士と云ふ事
ハ上系ハ

友我

尾州石巻一ノ一友我ハ一系等
人折リ百治元年ノ尾陽八百一冊
うりよしく信厚ハ幼き信原
武治より小治戸を傳へ改選所
と云ふ事

關根彌次郎

之縁のハ足合枝の道ノ関根
信原と号す
別は信原のハ信原
宗遊徳の振舞多ク
親ハ
又
石原のハ
思入
以

九州の長尾初彦の父多し。同

藤田之資

慶長之年海内鼎一東干戈卷弓矢戰陳之氣消已
則宣布文教盛德遠及海隅百有餘年終二胞胎其
光澤之我關夫子孝和爰二生儿夫子ハ天授之木
命世之器六歳ノ時人之会ノ敷算スルモ、ヲ見
テ曰某ハ失算一策某失算二策ト蔡文姬力絶絃
ヲ指カ如ク人人愕然トノ仰其面喟然トノ賞歎
之以テ此ヲ奇異トス即長スルニ及テ無師ノ算
數ノ奥妙此ヲ極ムルモノハ古人ノ所謂雖無文
王豪傑猶興ト云モノ其夫子ノ詔ヒカ又旁ヲ学
天官曆日盡ク知其大義自中歳至白首焦神極思

演段諸約翦管招差及角術圖法弧背立圖ノ術肇
造之又算題二途ヲテテ化万變自在ヲナスヘキ
者古人未幾天地之間ニ秘スル所夫子初テ悉ク
發之卒ニ以テ輯錄之分門聚類テ數百卷ノ書ト
ナシ以テ後進ノ由路トナスコトニヨリテ我
東方言數者本之關夫子夫子授之荒木子村英建
部子賢弘荒木子ハ授之松永子良弼建部子ハ授
之中根子元珪而關夫子ノ書其雜記ナルモ夫
子與荒木子未遑校讎ノ而止モノ松永子盡ク校
讎之略加己意關夫子ノ書以テ大成ル又久留島
子義太未知數ノ時始テ算書一二篇ヲ取テ一誦

メ悉ク知其說能言算數之壺奧即徒衆又盛ニノ
由是數有久留島学我先師山路先生主任始受業
中根子後師事久留島子最後弟子松永子先生沈
審穎悟且資性篤實ナリ即三君子悉ク授帳中之
秘遺ストナシト云夫ノ久留島子實ハ才ト云ト
イヘ凡其性不羈其書甚少於是子一家ヲ立ヘカ
ラ又先生以其緒言妙語合関夫子之學用授門人
稱天下大師徒衆充盛ナリ然レ凡先生謙遜退讓
之質常曰著述上木スルモノ関夫子及五君子其高
足弟子ノ他ハ不可也奈何トナレハ近世所上木
算書見之杜撰妄誕不可勝道此不獨自取笑賊夫

人之子也。卜故自著。スルトフ口、書トイヘル以
此ヲ公ニセス云云。藤田定資精要



天保七年三月十日

越智直澄

